

# いんば沼

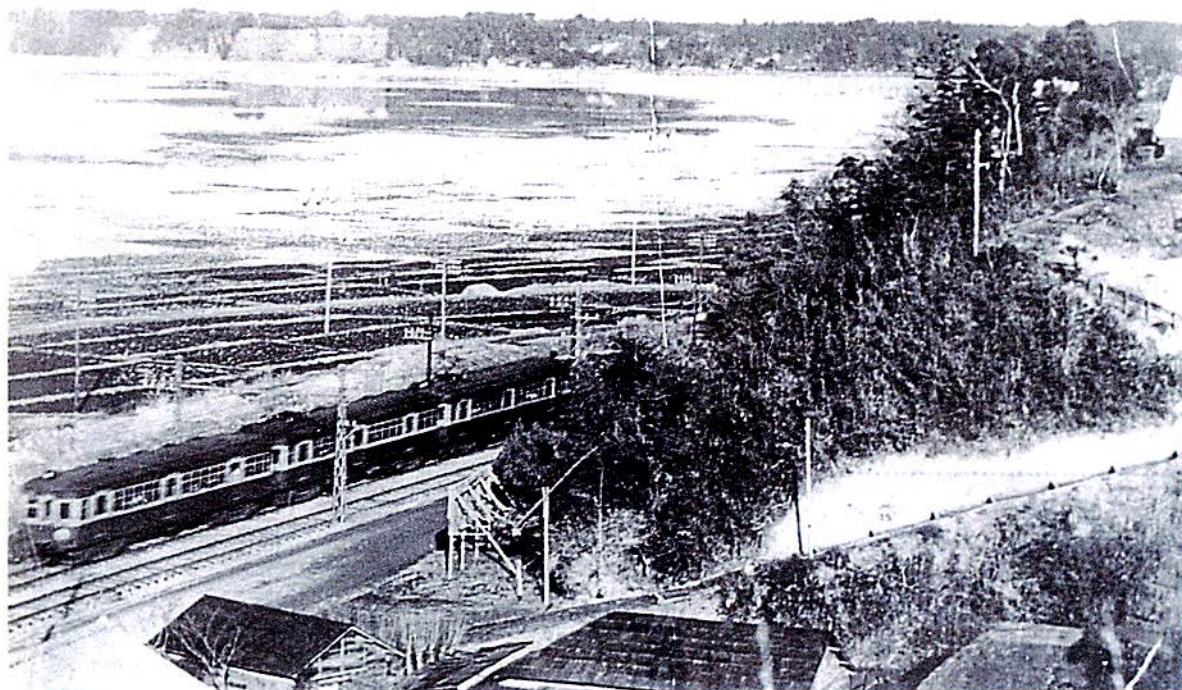
20号

編集・発行／(財)印旛沼環境基金

TEL 043-485-0397

2001年3月1日

三十年前の旧京成臼井駅周辺の写真



2000.12.1 臼井光勝寺集会所より

## 旧京成臼井駅周辺の風景

旧京成臼井駅周辺を写した新旧の写真に掲載しました。佐倉市臼井地区の旧京成駅を臼井荘跡現水道局より撮影したものと思われます。撮影者は鈴木国太郎氏が干拓前の印旛沼5枚組のうちの1枚です。平成13年現在の写真の様子と見比べてください。10年一昔といいますが、写真は、40年前の臼井地区印旛沼の周辺、田や畑、家屋、京成電車、新しくできた堤防、浄水場などが見られます。写真は新旧を対照にして貴重な場面を克明に映し出しています。

故郷は遠くにありて想うものと言われていますが、身近な過ぎ去った空間を懐かしむことも、また一興ではありませんか。貴重な資料を残してくれた鈴木国太郎氏に感謝しながら思いに耽って下されれば幸いです。

雑誌「いんば沼」の表紙を飾るものとして、新旧を対照にした写真を掲載いたします。次回もお楽しみください。また、貴重な写真等がございましたら、お寄せいただければありがたいと存じます。

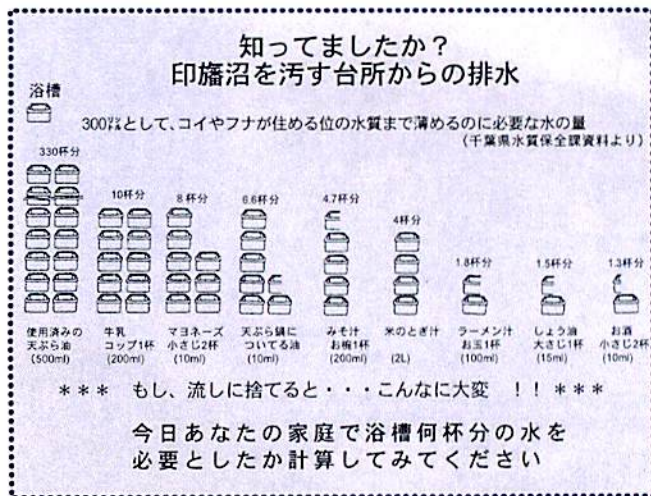
# 水質浄化に向けて、印旛村の取り組み

古川 美佐子

印旛村は印旛沼周辺市町村の中で、もっとも沼に面した土地柄のため、村の人は昔から印旛沼を身近に感じ、深い関係を持ちながら生活してきました。しかし、現在では、みんなが口を揃えて「昔の印旛沼は底まで透き通っていたが今の沼の汚れはひどい。」と言います。でも、「だから私は沼のために・・・に気をつけているよ」と言う言葉は殆ど聞きません。私自身村に住んで24年になりますが、沼の汚染源について深く考えたことはありませんでした。その私が今回の助成金制度をきっかけに、印旛村での活動を呼びかけ、2名の協力者を得て「印旛沼の水をきれいにしよう会」を発足しました。

に配布、等、の努力で約2,300部を配布することができ、印旛村広報紙10月号にも講演会のお知らせを掲載しました。

この時期、千葉県水質保全課による村内全戸の排水調査があったり、同広報9月号で沼についての掲載があったので、みんなの関心を集めるにはちょうど良い時期でした。



印旛沼を汚す台所からの排水 配布資料より

そこで私達の活動を出るだけ多くの人に知ってもらう。家庭雑排水が沼の汚染源になっていることを知ってもらう。各家庭で実行しやすい簡単な工夫を知ってもらう。等、に重点を置き、村の中央公民館で講演会を開催することにしました。問題は村の交通の便で、バスに乗ってまで聴きにきて下さると思えないので、パンフレットに工夫し、これを見てもらえば目的の半分は達成と考えました。

村内各公共施設や店舗、老人クラブ等にポスターを配布、地区によっては全戸ポステリング、店舗前で直接呼びかけて手渡し、村長、生活環境課、教育委員会の方をお願いして後援者になって頂き、学校関係全部



講演会の様子

講演会には約80名の参加者があり、この種の催しとしては大成功だと思えますが、それだけみんなの沼に対する関心が深かったのでしょう。参加者全員に手作りのエコタワシに使い方の工夫を同封した物をプレゼントしました。会場には、皆様に協力してほしいことを解ってもらうため、主旨、台所での工夫、油の処理の仕方、洗剤の選び方、無洗米のすすめ、米のとぎ汁の処理の工夫、等をパネル掲示し、解り易いよう現物をその前列に展示しました。廃油や野菜くずを糠と混ぜて肥料にしてもらえるように、糠の小袋を無料で用意したのは好評でした。沼の水生植物を長年研究されている笠井貞夫先生の、ヒシの実の実物と試食コーナーにもたくさんの人が集まり興味を示していました。

水質保全研究所、小林節子先生の講演は解り易く、講演後の質問も積極的で、日頃気になっていても、なかなか聞く機会が無いといった印象を受けました。

「一緒に活動しましょう。」という、私達の呼びかけに35名の方に署名して頂きました。その後、村の産業祭に出展し、楽しいことも必要だという会員の提案で、

手打ちそばの実演、試食を行ったところたくさんの方が集まって下さり、沼の為に私達みんなで気をつけましょうと、直接呼びかけることが出来ました。この講演会のおかげで、村内のボランティアグループから要望があり、家庭雑排水や沼について説明したところ、熱心に聞いて下さり、みんなで気をつけるように近隣

の方々、エコタワシをプレゼントしながら呼びかけて下さるということで、これは大きな成果だと思えます。私達の活動が、村内各地区に少しずつでも普及して、印旛沼の浄化に役立つよう、今後も機会を捉えて活動を続けていきたいと考えます。

## 印旛沼環境基金の活動を振り返って

白鳥 孝治

“印旛沼は、昔から豊かな自然に恵まれ、人の生活に潤いと活力を与えてきました。しかも、飲料水や工業用水、農業用水の水源として、また漁業や観光の場として大切な沼です。

最近、印旛沼は流域人口の増加にともなって、水質汚濁の進んだ沼になってしまいました。今こそみんなが力を合わせて水と環境を保全し、沼の再生に努めなければなりません。そして、きれいな印旛沼を次世代に引き継ぐことは、私たちの願いです。……………”

これは、当基金が設立当初に発行した“ご案内”の文章です。この精神は、そのまま現在でも引き継がれています。

設立当初、当基金が、まず行ったことは、印旛沼シンポジウムでした。そこで、日本を代表する諸先生をお招きして、印旛沼の環境保全のために採るべき道を話し合ってもらい、次の方針をえました。

①印旛沼は、河川などで、陸地と繋がっているの、沼と陸地を含めた“湖沼陸域生態系”として物事を考えること。

②水質ばかりでなく、自然的、社会的、歴史的なことを含めた幅広い課題として、印旛沼にしかない特徴を総合的に扱うこと。

この方針に沿って、当基金は、現在までずっと事業を展開してきました。

具体的な活動として、専門家の意見をお聞きする数々のシンポジウムやフォーラム、青少年の方々に自然や水辺を知り、親しむための調査研究などとともに、印旛沼流域を広く歩いて、地域の方々のお話を聞いて回りました。

ある古村では、“生活排水が川の水を汚すと言われているが、古村は何百年もここに住んでいながら、川の水は汚れていない。だから、生活排水で水が汚れることはない。”とっていました。たしかに、昔の古

村では、台所の排水は水溜めに入り、固形物を沈殿させてから上澄水だけを流していました。風呂や水溜めの水は、堆肥にかけていました。生活排水の浄化対策は、無意識のうちに行われていたのです。昔の生活の知恵と現代生活の垂れ流しの違いを、まざまざと感じました。これを機に生活排水対策の考え方は、大きく変わりました。

また、高崎川沿いを歩くと、地蔵様がたくさんあって、水辺と人の長い歴史を感じました。鹿島川沿いには湧水がたくさんあって、石で足場をつくり、コップを置いてある湧水もありました。湧水は、水田のかんがい用水だけでなく、喉を潤す飲み水であり、印旛沼の本当の水源であることが分かりました。湧水を全部集めると、1.3億ℓにもなり、印旛沼に流れ込む全水量の約1/3に相当していました。

印旛沼に関係した事柄は、知れば知るほどその範囲を広げていきました。調べて分かったことは、その都度、印旛沼白書や雑誌「いんば沼」のような印刷物にして広くお知らせしてきました。

時代はだんだんと変わり、NPOのような印旛沼をきれいにしようとするボランティア団体が多く誕生してきました。印旛沼のことをよく知った住民の方々は、このままではいけない、自分たちできれいにする行動に移そう、と考えたからでしょう。ありがたいことです。

これからは参加の時代です。知るだけで手をこまねいている時代は過ぎました。印旛沼環境基金も、これに応えられる活動をしたいと考えています。ボランティア活動を支援するために助成金制度を作りました。本雑誌「いんば沼」も住民の皆さんの、自らの活動を発表できる場として参加される雑誌にしたいと考えています。皆さんの熱いご支援をお待ちしております。

# 森とともに・・・

佐倉市立根郷小学校教諭 大谷 早苗



根郷小学校では、環境教育を総合的な学習の中心とし、「自然や自分を取り巻く環境の美しさや大切さに感動すること」「様々な社会事象を関係的にとらえること」「それを自分とのかかわりでとらえること」「地球規模の広い視野で物事を考えること」「実際に行動すること」ができる児童を育てたいと考えて、実践に取り組んでいます。

環境教育の大切さが叫ばれるようになり久しいですが、環境学習を進めて行く上で大切なことは何でしょうか。ひとつには、自然を愛する心とその美しさを感じる感性を高めることであり、もうひとつは、自分たちのふるさとを愛する心情を育てることではないでしょうか。環境学習は生涯学習であり、学校教育の中で、地域に根ざした活動を地道に進めていかななくてはならないと考えられます。

本校では8年前より環境教育に取り組んでいます。何かというと「リサイクルしないと。」「もったいない。」などという言葉も聞かれますが、知識としての環境、頭の中だけの自然になりがちです。しかし、本来の環境教育とはそういうものではないと言う考えから、総合的な学習の実践を行っていくことを機会に、今までの環境教育のあり方を見直し、教科の目標にとられることがない、自由な発想で学習を組み立てることにしました。そして変化する21世紀の国際社会の中で、主体的に生きるための資質や能力を培っていきたいと考えています。

特に、体験活動を重視し、そこから何かをつかんで欲しいと考え、カリキュラムを組むようにしました。

ここで紹介する5年生活動は、学校の近くにある「ぎょうせいの森」といわれる教育の森の施設を活用したものです。この森の活用は5年前より行っていますが、今までは社会科の学習の中で林業体験やボランティア活動を行ってきました。

しかし昨年度は、「豊かな自然体験をさせることで、自然を肌で感じる機会を作ってあげたい。」「自然体験を積み重ねることで自分を取り巻く環境について考える子どもを育てたい。」ということで、森をもっと自由に使う総合的な学習に取り組んできました。

中心となった考えはとにかく森を使って自由に活動するという事です。ネイチャーゲームや自由遊びをたくさん行い、児童の発想を生かした活動を行おうと

考えました。

まず、「ぎょうせいの森」に行き、一昨年度の5、6年生が植林をしたところの草刈をしました。その後、とにかく自由に過ごす時間を作りました。このときは、写真にあるように木登りをする児童などもいましたが、森の中でどのように過ごしてよいかわからず、戸惑っている児童もたくさんいました。



この活動のあと、児童に「森でこれからやってみようと思うこと」を書いてもらい、それをもとにグループを作り活動の計画を立てました。

児童からは

- ・森の中に家を作りたい
  - ・炭を作りたい
  - ・押し花をしたい
  - ・昆虫を調べたい
  - ・植物について調べたい
  - ・ボランティア活動をしたい
  - ・地図を作りたい
  - ・自分達で作ったもので遊びたい
- など様々なものが出されました。

二学期に入り、各グループで自分達の計画を基に活動をしていきました。そんな中で、友達ともめたり、思うようにいかず計画の見直しをしたりと様々なことがありました。

しかし、森の中で思い思いの活動をしていくうちに、



児童は、森の四季の変化や森林のよさを肌で感じてきました。森での活動の日は、普段とは違う児童の表情が見られました。

常に活動の後、反省し次の活動をどうしていくのか、最終的にはどのような形にしていくのかを話し合い、その都度教師も児童の話をついじくりと聞き、なるべく児童の思いが生きていくようにしました。

活動の状況や反省、今後の予定はファイルにとじるようにし、児童自身が自分達の活動を振り返ることができるようにするとともに、教師も児童の考えや活動の状況を把握しやすいようにしました。

活動の回数を重ねるごとに、児童の発想や活動が広がり、深まってきました。

また、国語の学習で「森林と健康」という単元をあつかいました。森林のよさを日頃体験しているのので体を通した理解ができ、体感したことと理論が結びつき、森への理解が深まったと思われます。

総合的な学習を行っていくにあたっては、保護者の理解と協力を得ることが大切です。今回は、授業参観で森でどのような活動を行っているのかを保護者の方に紹介しました。そこでは、森がどこにあるのか、どのようなところなのかを地図やビデオで紹介し、そこでやっている活動について、グループの代表に発表してもらいました。この発表の後、何人かの保護者から児童の自主的な活動に対する理解と賞賛・励ましの声をいただきました。



12月18日にぎょうせいの森で発表会を行いました。ここでは現地ではできない発表ということで、地図班が作った地図の除幕式や、工作班が作ったもので遊ぶ活動、ボランティア班が作った鳥の巣箱の取り付け作業などが行われました。また、自分達が作った作品を森に飾ったり、調べたことを実際に森で紹介したりというような活動も行われました。

全体で鬼ごっこやネイチャーゲーム、自由遊びも行いましたが、森全体の中で生き生きと走り回る児童の姿は、本当にすばらしいものでした。はじめのころ、

森の入り口付近でウロウロしていた児童、ただ友達とずわってしゃべっていた児童もみんな森中を駆け回っていました。



三学期に入り今まで製作したものを撤去する活動を行いました。その後、社会科の学習で林業について学びました。道徳でも「自然『尾瀬』を守る」を扱い、自然の大切さや、それを守るための努力について学習し、自分達にできることはないかを考えました。そこで今まで使っていた森でボランティアをしようということになり、この時期に適している植林としいたけの植えつけを行いました。

これは昨年まで行っていたクロスユニットに総合的な学習が加わったものといえます。また、社会科の学習でテレビ局の人の仕事を学んだ後、番組作りを行なったところ、森林の大切さにふれた番組を作ったグループもありました。これは特にこちらが意図したわけではありませんが、児童の中で森というものがそれだけ身近になっていったということではないでしょうか。

今回の「森とともに」の活動では、「森の役割」や「森を大切にしよう」ということを教えることはしていません。しかし、児童の心の中に森は生きつづけ、そのよさや楽しさ、すばらしさは忘れることはないでしょう。環境教育とはまず児童にそういう気持ちを育てることから始まるのではないのでしょうか。今後も児童の中に少しでも自然に対する感動を呼び起こすような実践を行っていきたいと思っています。



# 「酒々井の植物」をまとめて思う

折目 庸雄

## 1. 何故「酒々井の植物」まとめたか？

富里町在住の私が、なぜ隣の植物誌をまとめたのでしょうか。

結論から言いますと「惰性」と言えましょう。

富里に永く住み、お世話になった町に何か有益な物を残しておきたい ということで、ささやかなお礼として「富里の植物」をまとめたのが、1993年です。これで一応所期の目的を果たしたのですから、打ち切って当然だったのですが、中央博物館の大場達之先生の「続いて、芝山町でもやってみたら」と言う勧めに、簡単に乗ってしまいました。「中央博物館を頼りにすれば、出来そうぞ」と考えたことも事実ですが、それまでの活動で、雨が降らなければ必ず2～3時間、山野の植物を探して歩いた充実感が、私の続行の第一の理由だったように思われます。

1994～1995年と芝山町を、続いて1996～1997年と酒々井町を、県のメッシュマップを頼りに歩き回りました。その間健康でいられたのは、適度の運動量を確保できたお陰かも知れません。両町とも、町の自前の報告書の作成が出来なくて、千葉県植物誌資料の特集として、日の目を見させていただいたことを心から感謝しております。しかし、ここまで続いたのは「惰性」なのは間違いありません。

## 2. 半素人と苦勞

富里の植物調査に入る前は、理科の教師をしていたぐらいの「ずぶの素人」だったと、自分では思っております。その後、飽きずに植物を見続けて、やっと今では「半素人」ぐらいに成ったかな、と考えております。

よく「50の手習い」と言いますが、60過ぎてから植物調査の世界に飛び込んで、一番苦勞するのは記憶力の低下です。たださえ固有名詞が出なくて「えーと、何だっけ」と苦しんでいたのが、「路傍300」とか「路傍500」とか言われる、植物の多様性に立ち向かおうというのですから、未だに「ううっ」と詰まってしまうことは度々です。それにも増して二者択一で同定しなければならぬ植物があります。腺毛の有無で

「ニガクサ」と「ツルニガクサ」を見分けると言うような場合です。何回繰り返しても腺毛のあるのがどちらだったか、いちいち資料に照らさないと同定できません。一寸した記憶が出来ない自分に、情けないと思いますが仕方がないことです。

幸いなことに、植物を見て「これは、今までのものと違う」と言う勘は経験年数と共に鋭くなっているように思えます。現在では「疑わしきは、取って調べる」毎日が続いております。ただ、素人の悲しさで、違うことは感じて、それがなになのか、またどれほど貴重な物なのか、の判断が全く出来ません。今までに採取した中で「貴重な植物」であった事が何度かありますが、運良く生育地を記憶していて、何処で採取したか解らなくて困ったことはありませんでした。このことは、ほんとに「運良く」で、貴重さを意識しないで採取するので、何処で採ったか解らない可能性の方が遙かに大きいのですから。



## 3. 酒々井の植物の特徴

中央博物館の大場先生が「酒々井で一番貴重な植物は、アゼオトギリだね。」とおっしゃったことがあります。アゼオトギリは水田の畦などに生え、葉には明点が密に分布し、縁に黒点が並ぶ多年草で、県の最重要保護植物に指定されています。採取の時にはそれほど貴重な植物だという認識はありませんでした。葉を透かして黒点のあるのを確かめて、「ちょっと、違うぞ」と採取したに過ぎません。その後採取場所に何回か足を運んで調べましたが、その後はまだ見つかりません。ということは、ほんとに貴重な一株を根から採取してしまったことになります。この採取が私の調査の中では、植物保護上最も悔やまれることであります。

残念ながら私には、全国的や県下からの「酒々井の植物」を考える能力はありません。しかし、これまでの調査をまとめると、芝山・富里・酒々井と北総台地を東西に縦断する形で調査をしたことになります。その3町を比較して、眺めてみることから、酒々井の植物の特性が浮かび上がって来るのではないのでしょうか。

下表の【表1】は、私の調査全体と、その町でしか見付かっていない植物（特有の植物と言っても良いでしょう）の数ですが、この数の多少は、それぞれの調査の時間や精度が関係してくるので、それほど意味は持っておりません。

【表 1】

	芝山	富里	酒々井
リスト記載植物数	1300	1640	1370
3町共通植物数	1002		
町特有の植物数	79	288	127

1999. 12. 31現在の資料より

しかし、その内容を見ると、その町の特徴が良く出ているように思えます。

酒々井町でしか確認できなかった植物の主な物（県・国の保護植物に指定されている植物）15種を、次の表【表2】にまとめてみます。

【表 2】

・タニヘゴⒷ	・ナンバンハコベⒸ
・ヒキノカサⒸ	・アゼオトギリⒶ①
・ナガボノシロワレモコウⒹ	
・ノジトラノオⒸ	・ヤブムグラⒷ②
・オオマルバノホロシⒸ	・カリマタガヤⒹ
・オキナワジュズゲⒹ	
・オニナルコスゲⒹ	・コツブヌマハリイⒸ
・マシカクイⒷ	・クロヤツシロランⒹ①
・ヤマサギソウⒸ	

県の指定	Ⓐ最重要保護	Ⓑ重要保護
	Ⓒ要保護	Ⓓ一般保護
国の指定	①絶滅危惧ⅠB類（EN）	
	②絶滅危惧Ⅱ類（VU）	

この表からは、二つの事が言えます。

(1) 湿地性の植物が多い。

印旛沼周辺は干拓されて、沼は中央水路に、その両側は一見近代的な水田になってはいますが、その水路畔や水路に流れ込む河川の周辺には、まだ昔の湿地の自然が残されていると考えられます。したがって、湿地性の貴重な植物がひっそりと生育しているのでしょう。丹念に見ていくと、まだまだ発見されそうです。

(2) 古い里山が残されている。


宅地造成や開発が急激に進んでいるのですが、そ

の周辺には古い里山が保存され管理されています。放置された里山は急速に貧弱な植生になっていきますが、酒々井町には管理されて豊かな植生を保っている里山が多く見られるように思われます。

一方でまた、酒々井町だけで確認された帰化植物の特徴的な幾つかを、次の【表3】にまとめてみます。

【表 3】

・ミミイヌガラシ	・イヌカキネガラシ
・コバナキジムシロ	・カワチハギ
・ケガクミヤコグサ	・シャグマハギ
・ネコアサガオ	
・ヒゲナガスズメノチャヒキ	
・カラスノチャヒキ	



余り聞き慣れない帰化植物が多いのも、特徴と言えましょう。

これは、酒々井町の中央を鉄道や幹線道路が貫いている立地条件と、それに付随する町及び町周辺の開発や宅地造成が原因になっていると考えられます。このことは、幹線道路の国道51号に沿う緑地帯に見られる帰化植物の多さからも、容易に推定されます。

#### 4. 植物リストへの悩みと希望

先の【表1】からもお分かり願えるように、酒々井も芝山も、富里でさえも、完全な植物リストでないのは当然です。また、「完全なリスト」は夢の存在であって、そこへ向かって努力する為の目標です。私自身調査期間の二年間で良かったか、と言う疑問を持つては居ますが、これが3年・4年と長くなっても、同じ疑問を持つだろうと思います。富里は地元で、1991年に調査を始めてから10年も経つのに、まだリストが徐々に増えているのが実状です。

ですから、このような調査結果の冊子から、地域の植物に関心を持ったり興味を刺激されて、より精密なリストの完成を目指して努力してくれる次世代の人達が現れ活動してくれることを、心から希望している次第です。

一方で、アゼオトギリの例に見られるような「植物保護」、もっと大きく言えば「自然保護」も、これからの仕事としては、とても大切で難しい仕事だと考えています。酒々井町のこのすばらしい自然を、この姿の儘に残すことは、行政が保護に強い関心を持っていただくことは当然ですが、それにも増して町民の根強い努力が必須条件ではないかと考えます。

# 谷津に大型ジャノメチョウが飛ぶ

今井 正臣

地球温暖化の現象について、新聞各紙で報道されていますが、蝶の世界にも少なからず影響を与えているようです。植物調査のため先輩と一緒に八街市の谷津をこの一年間週一回のペースで歩いています。その現場で大型のジャノメチョウを見ることがあります。蝶はジャノメチョウ特有の飛び方ですぐには遠くに逃げず、すぐ側の樹林や野草の中に忍者のように保護色を頼りに止まります。採集は容易でしたがしばらく観察だけに留めました。

10月後半から11月初旬にかけて、ある場所では蝶の個体数が増え、どうも越冬するための準備ではないかなと思っています。そこで2個体を採集して中央博物館で同定していただいたところ、クロコノマチョウと同定されました。



私が中学校から高等学校にかけて蝶の採集に夢中になったころには、館山方面での記録があったと記憶しています。それが、八街市の谷津で多く見られることは、平均気温の上昇の影響があるのかと思います。

蝶の食草はイネ科ですのでどこにでも見られる植物です。以前北上したモンキアゲハの食草はミカン科で、ミカンの栽培が北上したこととの関係が問われましたが、それとは条件が異なり食草の影響とは考えられません。何かの影響でクロコノマチョウが北上してきているものと思われます。佐倉の植生調査でも確認されなかったようですが、その蝶が多数見られることは良いことなのか、悲しむべきことなのかは理解できません

んが、クロコノチョウが以前に増して北上していることは確かなようです。



## 編集後記

「雑誌いんば沼」の編集方法が変わりました。特に変えなければならぬ意義はありません。今までB5判縦書き4段が主体となっていました。A判にすると縦書きの文章が長くなり段落分けが難しくなります。そこで現在一般的に使用されているA判に合わせて横書きにすることとしました。

今後も印旛沼流域の沼に関連した、住民皆様のいろいろな考えを伝える広報誌として、環境情報を知らせるため広報活動を進めたいと思います。また、一方通行ではなく双方向の伝達を図る雑誌としたいと思いますので、皆様のご協力をお願いいたします。

今回は谷津の湧き水調査をしている小学校、水の浄化に取り組んでいる印旛村、酒々井の植物調査、について紹介しました。皆様の身近な雑誌として印旛沼周辺の情報を伝え、その情報が印旛沼の水質保全について活動なさっている人々及び諸団体に少しでも役立つことを願っています。

読者の皆様の印旛沼に寄せる様々な情報をお待ちしております。